Сампилдондовын Чулуун, Хурц, Андриан Борисов, Ока Хироки эмхэтгэсэн (2016) "Евроазийн нүүдлийн аж ахуй : Түүх, Соёл, Хүрээлэх орчин" CNEAS Reports 22（サンピルドンドウ・チョローン、胡日査、アンドリアン・ボリソフ、岡洋樹編『SNEAS Report 22　ユーラシアの遊牧　歴史・文化・環境』）東北大学東北アジア研究センター、pp. 229-239。

風戸真理（北星学園大学）

世帯の発展サイクルとともに伸縮する住居「ゲル」

1. はじめに

モンゴルの移動式天幕「ゲル」（*ger*）は、組み立て式の構造と軽さを特長とし［マイダル　1988（1981）］、遊動的な牧畜を営むのに適応的な住居である。一方で、現代のモンゴル国で使用されているゲルのサイズは多様である。その背景として、住人が、経年劣化するゲルを補修したり、生活の便宜に合わせてゲルに改変を加えることで、ゲルのサイズが変更されるという事実を、筆者はこれまでに指摘している［風戸　2015］。ゲルはその移動性と時間的な可変性によって「時空を超えて暮らしを包む住居」であるといえるのである［同上］。

図1　格子状の「ハナ」（壁）と丸い「トーノ」（天窓）

本稿では、モンゴル国におけるゲルのサイズ調整とゲルの使い方の特徴を、世帯の発展サイクルに位置づけて考察する。

ここでゲルの主要な部品について説明しておく。ゲルは大きく分けて、木製の「骨組み」とフェルトをはじめとする「カバー類」からなる。ゲルのサイズを主に決定するのは、骨組みのなかでもとくに壁をなす「ハナ」（*hana*）（図1）のサイズと枚数である。それにともない、天井を支える棒である「オニ」（*uni*）（図2）の長さが決まる。

図2　左の棒が「オニ」（天井）、右が「トーノ」（天窓）

2. 先行研究

2-1. ゲルの歴史

モンゴル高原においては、現在のゲルに似た形態の移動式住居がすでに13世紀の歴史書に現れている。バートルフーとオドスレンは、『元朝秘史』[1] には、住居を示す表現が10種類登場し、そのうち5つが「ボルガスン・ゲル」（柳のゲル）のようにゲルという語を含んでいることを指摘している。さらに彼らは、これらの住居語彙を20世紀に記録されたモンゴルの民族誌に照らして分析し、中世のゲルの一部が、モンゴル国各地の「ヤスタン」（モンゴル民族の下位分節）の20世紀前後の住居や倉庫に受け継がれていると述べている［Baatarhuu ba Odsuren 2014:53-66］。ここから、ゲルとよばれるものはモンゴル人のメジャー

[1]『元朝秘史』はチンギス・ハーンの一生を中心としたモンゴルの歴史書である。

な住居として長い歴史をもち、多様なタイプのものが使われてきたことがわかる。

18 世紀以降、ゲルは定住地をも含む多様な住環境において広く利用されるようになった［松川 1998］。ゲルは遊動的な牧畜生活に適した移動式住居として発達してきたが、18 世紀以降の都市の形成にともなって定住地でも多く使われるようになったのである。

20 世紀の状況については、D. マイダルの記述が参考になる。すなわち、内陸アジアの遊牧民社会には古代から、ゲルを生みだし、改良してきた創造的な経験があるが、そのうえに、社会主義期の研究者・建築家によるゲルの軽量化および合理的な形状の創出、構造の向上、そして工業化がある［マイダル　1988（1981）：107］。このように、20 世紀にゲルは、社会主義的な近代化政策のもとで構造・デザイン・生産方法などの面で科学的に改良されてきた。

2−2. ゲルのサイズ

次にゲルのサイズに関する先行研究を検討する。ゲルのサイズは同時代において多様であり、また、通時的にもそのサイズは変化してきた。

バトナサンによれば、19 世紀末には民衆のゲルのサイズとしては「小 4 枚ハナ」と「大 4 枚ハナ」が主流であった。「小」「大」はハナ（図 1）の「頭」の数、すなわち伸縮する斜めの格子の上部に位置する棒どうしの交差の数によって決まるのであるが、10 個（小）、12 個（中）、15 個（大）のものがあった。富者のゲルの多くは「大 6 ～ 8 枚ハナ」であった。県（アイマク）の庁舎として用いられたゲルには 10 ～ 12 枚ハナからなる巨大なものがあった［Batnasan　1987：167］。

マイダルによると、社会主義期の 1981 年頃にもやはり小 4 枚ハナのゲルがもっとも普及していた。そして、ゲル全体のサイズを分類する方法としては、ハナの枚数によって「小型」「中型」「大型」の 3 つに分類する方法があった［マイダル　1988（1981）：103］。この 3 分類は現代でも使われている［MNS　0370：2003］。ただし、ゲルのサイズ・形状・素材等には地域によってバリエーションがみられた［Batnasan　1987：167］。

20 世紀末にゲルは変化した。前川は、2000 年代には多くのゲルがウランバートルの工場で集中的に生産され、全国で流通する工業製品となり、均質化したと指摘している［前川　2007］。とくに 1980 年代以降、ゲルは工業製品として規格化され、「モンゴル国家規格」[2] によって部分と全体のサイズ・仕様・素材・製法等が細かく定められ、ゲル生産の多くの部分が標準化された［風戸 2015：113］。たとえば、2003 年に定められた「モンゴル国家規格：モンゴル・ゲルの木（骨組み）」は、工業製品として製造されるハナの頭の数について、12 個または 15 個を標準としている。そして、ハナの頭の数が 12 個のものを「小」、15 個のものを「普通」とみなし、「小○枚ハナ」「○枚ハナ」という二つの表現で大小を区別している［MNS　0370：2003］。

にもかかわらず、2010 年代のモンゴル国で筆者が見た、実際に使用されているゲルのサイズは実に多様であった。筆者はこれまでに、モンゴルの人びとが自身のゲルのサイズを自ら変更していること、その背景として、ゲルの仕様が標準化されていることによって、住居の部品を交換したり、部品の一

[2] ゲルに関する国家規格には、「MNS 0296:2008（MNS 296:83 の代わりに）ゲルのフェルト」「MNS 0370:2003（MNS 0370:1986 の代わりに）モンゴル・ゲルの木」「MNS 0414-1:2012（MNS 0414:1986 の代わりに）ゲルの覆い布」「MNS　0370:2011 モンゴル・ゲル」などがある。

部を切断したりして組み立て直なおすことによるサイズ調整が、職人でない一般の人びとにも容易になっていることを指摘してきた［風戸　2015］。以下では、人びとの各ライフステージにおける住まい方の特徴や、生活に必要なゲルの個数とサイズについて、民族誌的なデータに依拠して記述し、分析をおこなう。

3. 調査地・調査方法

図３　調査地の地図

本稿のもととなる調査は主に、2012 年 8～9 月のホブド県ドート郡（以下、「ドート」とよぶ）と、2014 年 9 月にウランバートルでおこなった（図 3）。調査方法は人類学的な参与観察および聞き取り調査である。とくにドートでは 30 代から 60 代の 17 組の夫婦にゲルの使用履歴をたずねた[3]。世代には夫の年齢を用いた。

4. 所有してきたゲルの個数とサイズ

4-1. 所有してきたゲルの個数

ドートの人びとにこれまでに所有したゲルの数と、ゲルを新規に購入・取得した契機をたずねた。表 1 は、4 組の夫婦がこれまでに所有してきたゲルの個数を示したものである。30 代の若い夫婦は 2 個、50 代以上の年長夫婦は 3 ～ 5 個のゲルを所有してきたことがわかる。以下に、複数のゲルを所有してきた夫婦の、ゲル利用の具体例を紹介する。

表１　これまでに所有したゲルの数

	ゲルの数（個）
35 歳男性	2
53 歳男性	3
60 代男性	5
68 歳男性	3
合計	13

《事例 1》BSR（53 歳、男性）　これまでに 3 つのゲルを所有

BSR は 1980 年にウランバートルで結婚し、職場が所有する中古のゲルに入居した（ゲル X）。1991 年、国家の体制転換にともない BSR は失業し、故郷のドートに戻ったところ、BSR の父母が 6 枚ハナのゲルを立ててくれた（ゲルＡ）。

同年、BSR の祖母（父の母）が亡くなった。祖母は BSR の亡き父方オジ（父の弟、45 歳）と二人で暮らしていて、このオジが一人になってしまった。そこで、BSR はオジを彼の 4 枚ハナの小さなゲル（ゲルＢ）とともに引き取った。BSR は子どもの頃、このゲル（ゲルＢ）でオジと祖母と 3 人で暮らしていた。

1990 年代に息子 BDO が結婚した。BSR は新ゲル（ゲルＣ）を買って立てて息子に与えた。それまで BSR は家畜を多く所有していたが、家畜を BDO の新ゲルの支払いにあて、また BDO に一部を分与したことで家畜が減った。しかし、BDO はまもなくゲル C を使わなくなり、郡の中心地にある倉庫に片づけ、BDO の妻の父のゲルに同居することになった。BDO らが住

[3] 聞き取り調査の時点で、17 組中 16 組の夫婦は草原で、1 組は郡の中心地でゲルを立てて住んでいた。

むゲルは今、BSR のゲルの前に立っている。

2012 年春、BSR はゲルAのオニを切り、ハナを抜き、小さい天窓を購入して全体を小さくして、現在までこの小さなゲルに住んでいる（ゲルA）。ゲルBは、夏には倉庫に保管し、春に出して立て、生まれたばかりの当歳ヒツジを囲い入れるのに使っている。このゲルBは 60 年前から使われてきた古いものである。

この例では、BSR夫婦は首都ウランバートルで結婚し、最初、職員宿舎としての職場のゲルに入居した。その後、故郷ドートにUターンした時、結婚式の時にもらうはずであったゲルを親から贈与された。それ以来、BSR夫婦は複数のゲルを使用し、購入してきた。それは、第 1 に、自身の家族が実際に使用するゲルを買い替えたり、2 つのゲルを同時に使用したりするためであり、第 2 に、息子の結婚にさいしてゲルを与えるためであった。

次に、子どもの成長に注目して家族の変化とゲル使用の変化との関係を記述する。子どもが学齢期に達して学校に入学する時期に家族の住生活が変わる。子どもが定住区の学校に通うようになる時、子どもが母とともに定住区に住み、家族の一部が草原で家畜飼育に従事するというような世帯の居所分離が起きるのである。以下に、子どもの通学の都合で家族の居所が分かれ、一つの家族が複数のゲルを所有してこれらを使い分ける事例を示す。

《事例２》HYG（35 歳、男性） 世帯の居所分割

1999 年、HYG は結婚し、HYG の父母が大きなゲルを買ってくれた（ゲル D）。ところが 2003 年、HYG は天井を切ってゲルを縮小した（ゲル D）。さらに 2005 年から、HYG は、ger A からハナを抜いて 4 枚ハナとし、この小型ゲルに独居して家畜の世話にあたってきた。その間、妻は、学校に通っている子とともに県の中心地に住んで子どもの世話をするのであるが、2006 年、そのための大きなゲル（ゲル E）を買って県の中心地に立てた。

HYG夫婦は結婚時に夫の親から大きなゲルを贈与されたが、4 年後にはゲルを縮小し、小さなゲルで子育てを始めた。ところが、子どもが通学するようになると、家族が草原と定住区に分かれて住むために二つのゲルが必要になった。そこで、草原では小さなゲルに夫が残って季節移動しながら家畜を飼育し、定住区には居住性の高い大きなゲルを買って立て、学期中（9 月～ 5 月）、妻と子どもたちがこのゲルに住んだ。小さなゲルは移動に適しているが、大きなゲルには家具や家電を多く置くことができるため、家族の生活・子どもの勉強・客を迎えての社交に便利なのである。なお、子どもの通学のために家族が分かれる時、夫が家畜とともに草原に残り、妻は草原と定住区を行き来して家族と家畜の両方の世話をすることが多い[4]。

[4] 2012 年の夏季休暇中に草原で暮らしていて、9 月の新学期以降に居所が二つに分かれる予定であった家族 6 組に、妻の秋以降の居所をたずねた。その結果、3 人の妻は夫ともに草原に、残りの 3 人の妻は子どもとともに定住地に住む予定であった。妻が草原に住む家族は、子どもの年齢が高く、子どもたちが自身で炊事や洗濯ができるようになっていたのに対して、妻が定住地に住むのは、子どもが幼く身のまわりの世話が必要だと親が考えているケースであった。

4－2. 結婚時とその後のゲルのサイズ

人が人生において自身のゲルに住み始めるのは原則として結婚式の日からである。ゲルの使用開始は結婚、つまり新しい世帯＝核家族の創出時点であると認識されている。若夫婦は、新郎の両親から一つのゲルを買い与えられる。子が結婚する時に親から与えられるゲルは「シン・ゲル」（*shine ger*、新しいゲル）とよばれ、結婚式当日には結婚式会場として客をもてなすのに使われ、翌日からは新婚夫婦の住居となる。

表2　結婚時と調査時点に住んでいたゲルのサイズ

	ゲルのサイズ			合計
	小型	中型	大型	
ハナの数（枚）	3－4	5－6	7以上	
結婚時（戸）	2	2	6	10
調査時点（戸）	6	6	2	14

ドートの人びとが結婚時と調査時点に居住していたゲルのサイズを表2に示した。ゲルのサイズは、ハナの枚数によって「小型」「中型」「大型」の3つに分けた。表2から、結婚時には大きなゲルに住む人が多いが、その後は小型または中型のゲルに住む人の方が多いことがわかる。逆にいえば、人びとは小中型ゲルに住んでいることが多いが、結婚式とその後の新婚の時期には大型ゲルに住んでいたのである。

次に、ドートで調査時点において使用されていたゲルの直径を実測した。ゲルの内部で床の直径を測ったところ、5枚ハナのゲルは直径450cm、小6枚ハナは480cm、6枚ハナでハナの一部が重なっているゲルは535cm、6枚ハナは590cmまたは600cm、8枚ハナでは650cmであった。床面積を計算すると、たとえば6枚ハナのゲルは約28平米の円形のワンルーム住居であるといえ、ここにかまどや家具を置いて、夫婦と未婚の子どもたちが暮らしているのである。結婚時は床面積が大きめなゲルに、それ以降は小さめのゲルに人びとは住んでいるといえる。

ただし、調査時期は秋、すなわち家畜の肥育をおこなうために頻繁にキャンプ地を変える「オトル」とよばれる移動をおこなう季節であった。モンゴルでは一般に、秋のオトルの季節には小型のゲルに住んで機動性を高め、頻繁に移動する傾向がある。実際、複数のゲルを使い分けている夫婦は、「今は小さなゲルに住んでいる、冬になったら大きなゲルに住みかえる」と述べた。冬には一カ所のキャンプ地に長期滞在するため、居住性の高い大きめのゲルに住みたいということなのである。

なお、人びとは頻繁に「昔の人は小さなゲルに住んでいた」と語った。具体的にいうと、ハナの数が今と同じでも、ハナの「頭」の数が12個などの「小ハナ」であったというのである。年長者は、自分らの結婚時のゲルがこの小ハナのゲルであったと語った。また、結婚式の時に親から与えられたものとは別に、後に祖父母らからゲルを相続することがあるが、そのような昔の人が使ってきたゲルは小さいということである。

5. ゲルのサイズ変更

《事例1》と《事例2》では、夫婦は父母からもらったゲルのハナを抜き取って枚数を減らし、オニをのこぎりで切断して短縮し、ゲルを小さく改造して住んでいた。オニは一度切ったら元には戻らない。ハナもいたんだ部分を切り落とした場合には元に戻らない。ただ、ハナを抜き取って枚数を減らしただけなら、再びハナを挿入することでゲルのサイズは復元できる。

このように、ゲルは縮小されることが多いが、その理由は次の3つである。第1に部品の破損・摩耗・

疲労である。第2に移動や暖房など生活コストの低減、第3に風への耐性を上げること、である。ゲルを縮小するに至る経緯を具体的に述べたい。

5－1. 摩耗・破損した部品の切断

ゲルを支える骨組みには、ゲル本体の重さに加えて風や人為により大きな力がかかり、接合部などが頻繁に摩耗する。とくにハナどうしをつなぐ接合部は折れることが多い。一本折れても支障はないが、そのままにしておくとほかの部分にひずみがきて、ひびが入ったり、折れたりする。オニは使っているうちに先端がこすれて摩耗するが、全部が同じ割合ですり減るわけでないので、ゲルが傾く原因となる。「バガナ」（柱）（図4）も「トーノ」（天窓）との接合部がすり減り、片方のバガナが短くなる。傾くと一部の部品に力がかかり、早くいたみ、倒壊の危険が増す。

図4　中央の2本の棒が「バガナ」（柱）

このような一部の部品の摩耗・消耗にさいしては、同じサイズの部品で代替する方法もあるが、いたんだ部分を切断するという選択がなされることがある。一部の部品を縮小するとゲルがゆがんで強度が低くなるため、全体的に調整を加えることになる。《事例1》にあったように、オニを切ればハナを抜く、ハナを切ればオニも切り、トーノを小さいものに交換するなどである。このようにゲルの部品の摩耗した部分を切断し、全体のバランスを整えることにより、ゲルのサイズが縮小されるのである。

5－2. 生活コストの低減・耐風性の向上

ゲルを縮小する理由として、暖房コストの低減をあげた人の語りを紹介する。

《事例3》BSR（53歳、男性）　暖房コストの低減

大きなゲルは畜糞燃料を多く食う。寒い。ゲルのサイズは家族員数に合わせて調整する。小さなゲルは少しの燃料で暖まる。

BSRはゲルのサイズは家族の成員数に合わせて決めるものであると明言している。居住スペースを確保することで得られる居住性とのバランスを考えながら、少ない燃料で住居を暖めることができるよう、ゲルのサイズを最小に調整するのである。

次に、移動コストを下げるためにゲルの部品を切って、ゲルを縮小した例を示す。

《事例4》BSH（33歳、男性）　移動コストの削減

季節移動のさいにロシア製ジープで1回で運べるよう、ゲルを小さくした。2009年頃までドートでは、移動はジープで2回運搬するのが主流で、私たちは大きなゲルに住んでいた。その後、1回で運搬するのが主流になり、ゲルを縮小した。

季節移動には荷運び用ジープのガソリン代がかかる。ゲルのサイズと重さは燃油コストに直結する。しかしながら、移動コストと連関したゲルのサイズ決定には地域におけるゲルのサイズに関わる流行があるようである。モンゴル国ではガソリンの価格がほぼ毎年上がってきたので、それへの対応としてゲルを小さくしたという面もあるだろう。だが、地域全体において大きなゲルに住んでいる人が多い時には多数がそれに同調していたが、2009 年頃には小さなゲルに住んでガソリン代を浮かせる人が目立ち始め、その他の人びともこれを模倣して小さなゲルに住むようになったと考えられる。だからといって時代と共にゲルが一方向的に縮小してきたわけではない。「昔の人は小さなゲルに住んでいた」という語りがあったように、ゲルのサイズの流行は、小さくなったり、大きくなったりをくり返しているのかもしれない。

最後に、強風でゲルが壊れないように、大きなゲルから小さなゲルに住みかえた事例を紹介する。

《事例 5》PRV（60 代、男性） 耐風性の向上

2012 年の夏、PRV は大きなゲルに住んでいたが、秋営地に移動する時、大きなゲルを郡の中心地に保管し、今住んでいる小さなゲルに住みかえた。秋営地は川の近くで、風が強かった。大きなゲルは風や嵐に弱く、強風が吹くと天窓がぐらつき、オニ（天井の棒）がぼろぼろと落ちてくる。川のそばでは大きなゲルに住むのは危険なので、郡の中心地から小さなゲルを運んできた。

耐風性の面では小さなゲルは大きなゲルよりもまさっているといえる。地形の影響で風の強いキャンプ地に移動する時には小さなゲルに住み替えるという、ゲルの使い分けがみられるのである。

5-3. 親からもらったゲルにのこぎりを入れること

2014 年 8 月に筆者はモンゴル国立大学社会科学部・人類学・考古学教室の学生たちにゲルのサイズについての講演をおこなった。参加した学生 38 名のほとんどが地方の出身で全国の県から集まってきており、そのうち 18 名は親が牧畜従事者であった。

彼らに、ゲルのサイズ変更についての上記の調査結果を紹介したところ、「うちではオニを切りません」「親や先祖から相続したものは大切にして、切りません」という意見が出た。この点について筆者は以前から興味をもっており、ドートの人びとに次のような質問によって確認していた。「親からもらったものを切ってよいのですか」「部品を切ったら戻らないけれど、よいのですか」などである。これらに対する答えは、「必要のためなら切る」「もらったものは自分のものだから親は関係ない」などであった[5]。

学生たちは、草原での生活においては多様なサイズのゲルが必要であることには強く同意した。季節や目的により小さなゲル、大きなゲルを使い分けるのであるが、そのためには、複数のゲルを所有して、使わないものは定住区の倉庫（アンバル）[6] に保管するというのが学生らの主張であった。

学生たちは16歳をはじめとする十代後半の青年たちであり、自立した住生活を経験したことがない。

---

[5] ただし、先祖から継承した天窓「トーノ」は他人には売らず、子に贈与するといった語りがあった。

[6] 牧民は冬営地や定住区の倉庫に、使っていないゲルの部品や冬物・夏物衣料などを保管することが多い。

このため、学生たちは文化的な理念を強調する傾向が強く、一方、すでに結婚して生活の必要に直面したドートの既婚者たちはより現実的な選択をし、それを自らの自立の証として語るのを好むのではないかと考えられる[7]。

6. 討論：世帯の発展サイクルとゲルの利用

6－1. サイズと個数

以上のデータにもとづいて、世帯の発展サイクルとゲルのサイズ·個数との関係について検討したい。世帯の発展サイクルと夫婦が所有するゲルのサイズ・個数との関係の理念型を表3に示した。

夫婦は結婚時に、大きなゲルを1つ父母からもらい受けて、所有する。しかし数年後には、燃費等のためにこれを縮小することが多かった。やがて子が育ち、学校に通うようになれば、世帯メンバーの居所を草原と定住区に二分し、草原には小さなゲルを、定住区には大きなゲルを買い増し、合計2つ以上のゲルを所有することになる。やがて子らが結婚適齢期に近づくと、親は自分たちのゲルの他に息子の数だけ結婚式用の大きなゲルを買って準備する。そして最後に、子らが婚出して老夫婦

表3　世帯の発展サイクルとゲルのサイズ・個数

	結婚	数年後	子が増える	息子を結婚させる	子が巣立つ
ゲルのサイズ	大	小	大	大	小
ゲルの個数	1	1	≧2	≧1＋息子の数	1＋予備

2人になる。この時には、子が使わなくなかったゲルや、一部の部品がいたんで使わなくなったゲル、そのなかの使える部品などの予備が多く残っている。年長者は、これらを組み合わせて小さなゲルと大きなゲルを立て、これらを季節によって使い分ける。このようにして、人びとは家族の成員数と家族のライフステージに合わせて、ゲルのサイズ・個数を調整することで、居住性や燃費等をコントロールしているのである。

そのさい、経済合理性だけでなく、地域や時代におけるゲルのサイズに関する流行なども、人びとのゲルの使い方に影響していた。「昔の人は小さいゲルに住んでいた」という語りは、ハナの幅が一世代前よりも現在の方が広くなっているということを示している。また、ひとつの世帯が暮らすゲルが拡大・縮小する具体的な方法としては、現存するゲルの部品を切断して縮小する方法と、サイズの異なるゲルや部品を新規に購入する方法とがあった。理念としては親から贈与されたゲルには不可逆な変工を加えないのが望ましいが、実生活においては若いうちには追加のゲルを新規購入する余裕は少なく、ドートの若夫婦たちは部品を切断することが多かった。結婚して自身のゲルを所有した若夫婦が、これに自身の手で変工を加えることは、自立のひとつの社会的な表現であるとみなすこともできるかもしれない。

6－2. ゲルの属する社会的領域

次に、ゲルのバイオグラフィー[8]、すなわち時間とともに変化するゲルの機能や社会において占める

[7] モンゴル国立大学はモンゴルのなかでもっとも優秀な学生の集まる大学であり、その学生の親は、手持ちのゲルを改造することなく、必要なサイズのゲルを新規購入する経済力があるということも考えられる。

位置に関する理念型を図5に示す。最初、「シン・ゲル」とよばれる大きなゲルは結婚式の会場として使われ、翌日からは新婚夫婦の住居および客間となる。ゲルはこの時点においては、社会の公的な領域と家内的領域[9]とを包括する構造物として機能している。

その後、ゲルは数年内に縮小されて中～小サイズにされ、家族の生活の場および客間となることが多い。これが使い込まれ、全体に古びてきて、これとは別に大きなゲルが購入されると、中～小サイズのゲルは再び役割を変える。さらに縮小されて大きなゲルの横に立てられ、「イルー・ゲル」（*iluu ger*、余分のゲル）とよばれて調理場や物置の機能を果たすのである。また、大きなゲルが定住区で家族生活の場となっているのに対して、古びた小さなゲルは草原で単身赴任して家畜の世話をする男性の出作り小屋のような役割を担うことも多い。このようなゲルは「マリン・ゲル」（*malyn ger*、家畜のゲル）とよばれる。この時点でゲルは、客を受け入れて社交をするような公的領域を離れて、主に世帯の経済活動を展開する家内的領域に属する施設となる。

最後に、かなりいたんだ小さなゲルは、春のヒツジ・ヤギの出産期に生まれたばかりの仔ヒツジ・仔ヤギを収容する畜舎となる。このようなゲルを「トゥリン・ゲル」（*tolyn ger*、仔畜のゲル）とよぶ。この時点で、畜舎となったゲルは家畜に温かい寝床を提供する動物用の施設となっている。

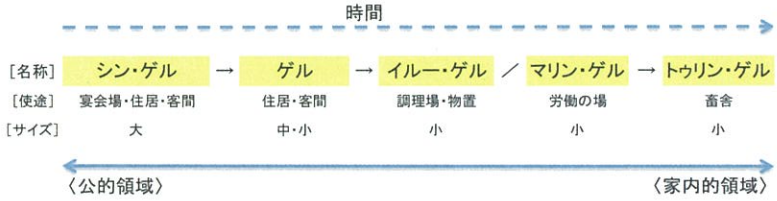

図5　時間とともに変わるゲルの機能

7. おわりに

ゲルのサイズは多様であった。とくに結婚時には人びとは大きなゲルに住み、その後は小さめのゲルに住むことが多かった。その背景として、小さなゲルは暖房コストと、移動コストを下げ、風への耐性を上げるという積極的目的があった。また、ゲルそのものも経年劣化するために補修や改変を加えられ、摩耗した部分を除去する目的で縮小されることがあった。

次に個数について述べると、人びとはその人生の時間のなかで所有していた。ある人が一生のうちに所有するゲルの個数は、自らの家族の必要分に、息子の数を足したものであるといえる。家族に必要なゲルの数としては、子どもが学齢期に達した時に世帯員の居所を定住区と草原の二つに分割するため、少なくとも定住区に一つと、草原に一つのゲルが必要となる。その時、草原では移動性の高い小さなゲル、定住区では居住性の高い大きなゲルが用いられていた。草原の小さなゲルには夫、定住区のゲルには子どもが住み、妻は両者のあいだを行き来していた。

ドートの人びとは、家族の成員数や家族の状況変化を含みこんだ世帯の発展サイクルに合わせて、

---

[8] イーゴル・コピトフは「モノの文化的履歴：プロセスとしての商品化」という論文で、人およびモノが個別化と商品化のあいだを行き来することを事実に注目し、人やモノに「バイオグラフィー」をみとめてその伝記的な研究をおこなうことを提案した [Kopytoff 1986]。

[9] 清水昭俊は「家庭内」および「公的」領域の概念を用いて、社会の二重文節性を検討した［清水　1995］。

複数の、サイズの異なるゲルを使い分け、そのことにより、家族の住空間を縮小・拡大していた。彼らの行動には、移動を前提としたミニマムで合理的な暮らしを草原で続けつつ、同時に定住区において居住性の高い生活空間を確保するという、対極に見える二つの要求を同時に実現しようとする柔軟な思考がみてとれる。彼らが使い分ける複数のゲルは、親から贈与された新しいゲルの部品を切断して改造したものであったり、いたんで使わなくなったゲルの部品の寄せ集めであったり、先祖から継承した古いゲルの部品を含むものであったりと、ブリコラージュ的なものであった。モンゴルのゲルは、空間的な移動性が高く、サイズは可変性に富み、かつその構成が寄せ集め的でいいとこどりな住居なのである。

ゲルの部品の出自はさまざまであるが、組み合わされて立てられたゲルは総体としてひとつのバイオグラフィーを有し、複数の社会空間のあいだを移動する。シン・ゲルは婚姻儀礼を含む人間の社会生活の公的領域の舞台となるが、古びて小さくなったゲルは、モンゴルにおいては高い文化的な価値を与えられているとはいえない調理に関する領域、すなわち女性が多く使用する家内的領域に移る。そして、もっと古びたゲルは人間の住居でなく家畜の畜舎となるのである。

以上から、現代モンゴル国におけるゲルは、世帯の発展サイクルにともない、そのサイズとともに個数や用途が変化するという使われ方をしていることが示された。

〈謝辞〉

本研究は、JSPS 科研費 JP90452292「生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性」（研究代表：風戸真理）、平成 23 年度～平成 26 年度（若手 B）の助成を受けたものです。調査にさいしては東京外国語大学の上村明先生にご協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

〈文献〉

Baatarhuu, B, Odsuren, D. (2014) “Mongolyn Nuuts Tovchoon” dahi ger, oron suuts. In *Chingis Haany tursun gazaryn ner “Deluun Boldog” mun uu?*, Baatarhuu, B, Odsuren, D. (eds.), Ulaanbaatar, Admon. pp. 53-66.

Batnasan, G. (2002(1987)) Oron suuts, In *Mongol Ulsyn Ugsaatny zui I*, Ulaanbaatar, Monsudar, pp.165-185.

KOPYTOFF, Igor (1986) The cultural biography of things: commodization as process. In *The Social life of Things*. Appadurai (ed.), Cambridge University Press. pp. 3-63.

風戸真理（2015）「時空を超えて暮らしを包む住居 ― モンゴル･ゲルのフレキシビリティー」佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編『世界の手触り』ナカニシヤ出版、pp.109-127。

前川愛（2007）「モンゴル・ゲルのモダンな変身」『建築雑誌』122（1561）：34–35。

マイダル、D.（加藤九祚訳）(1988（1981)) 『草原の国モンゴル』新潮社（Maidal, D. 1981 *Pamyatniki Istorii I Kulitury Mongolii*, Izdatelistvo Mysly）。

松川節（1998）「移動と定住のはざまで」佐藤浩司編『住まいをつむぐ』学芸出版社、pp.196–214。

MNS 0370:2003 (MNS 0370:1986-yn orond) *Mongol geriin mod.*

MNS 0296:2008 (MNS 296:83-yn orond) *Geriin esgii.*

MNS 0370:2011 *Mongol ger.*

MNS 0414-1:2012 (MNS 0414:1986-yn orond) *Geriin burees.*

清水昭俊（1995）「序説 — 家族の自然と文化」清水昭俊編『家族の自然と文化』弘文堂、pp.9-60。

CNEAS Reports 22

ЕВРОАЗИЙН НҮҮДЛИЙН АЖ АХУЙ

Түүх, Соёл, Хүрээлэх орчин

Монгол Улсын ШУА-ийн Түүхийн Хүрээлэн, БНХАУ-ын Өвөр Монголын Багшийн Их Сургуулийн Аялал Жуулчлалын Дээд Сургууль, ОХУ-ын Шинжлэх Ухааны Академийн Сибирийн салбарын Умардын Цөөн Тоот Ард Түмний Асуудал ба Хүмүүнлэгийн Судалгааны Хүрээлэн, Японы Тохоку Их Сургуулийн Зүүнхойт Ази Судлалын Төв хамтран зохион байгуулсан эрдэм шинжилгээний бага хурал, Улаанбаатар, 2014 оны 9 сарын 5.

Эмхэтгэсэн:
Сампилдондовын Чулуун
Хурц
Андриан Борисов
Ока Хироки